



| | |
|------------------|---|
| Title | チルドレンズ・センターにおける子どもと家族への支援 |
| Author(s) | 原田, 恒恵; Harada, Nobue |
| Citation | 教育福祉研究, 17, 109-121 |
| Issue Date | 2011-11-01 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/47429 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | HARADA.pdf |



チルドレンズ・センターにおける子どもと家族への支援

原 田 恒 恵

はじめに

—シュア・スタートとチルドレンズ・センター—

イギリスでは、1999年より、国内で最も困難な状況に置かれた地域に住む家族を多方面から支援することを目的としたシュア・スタート・ローカル・プログラム（以下シュア・スタート）が開始された。ブレア率いる労働党政権は、イギリスにおける子どもの高い貧困率を問題視し、2010年までに半減、2020年までに撲滅するという目標を掲げた。シュア・スタートは、この目標を達成するための諸政策の一部として提案・実施された。

労働党政権は、政権交代後、包括的政府支出再検討（Comprehensive Spending Review）の一環として、乳幼児に対するサービスの省庁間再検討（Cross-Departmental Review of Provision for Young Children）を行ったが、それによって、乳幼児に対するサービスは自治体・地域によって異なっており、統一化されていないこと、特に就学前の子どもとその家族に対するサービスが整っていないことが明らかになった（鈴木 2008：121、津崎 2009：73）。保育制度も整備されておらず、子どもを預けるためには民間の保育所に高額な保育料を払わなければならなかったため、経済的に困難な親は子どもを保育所に預けて働くことができなかった（埋橋 2011：46）。そのために、手当に頼って生活することを余儀なくされている家族も少なからずいたといわれている（埋橋 2011：46）。そして何より、保守党から引き継いだ当時のイギリスにおいては、子どもの貧困率が非常に高く、深刻な状況であったため、そのような中で生活する子どもと家族を支える必要があった。これらの状況を打開するために、一連の保育・幼児教育政策と

シュア・スタートが提案・実施された。

シュア・スタートを考案するにあたっては、1970年代に労働党が実施したコミュニティ・ディベロップメント・プロジェクト、1960年代にアメリカで展開されたヘッド・スタートやペリー・プリスクール・プロジェクト、そして国内における保健・教育分野の各種の施策が参考とされた（埋橋 2011：38-39、41、津崎 2009：72-73）。

シュア・スタートの特徴としては、収入の多寡で線引きをせず、指定された地域に住む5歳未満のすべての子どもとその家族を対象としていること、家族や地域のニーズに応じ、各センターが独自のプログラムを立ち上げたこと、近隣にある他の機関・組織と連携して子どもと家族を支えたことが挙げられる。すべての家族を対象とすることで、恥ずかしいと感じたり、後ろめたく思ったりすることなく利用することができるといわれている。また、家族との信頼関係を築くことが重要であると考えられていたため、家族のニーズに迅速かつ柔軟に対応することが要求された。

シュア・スタートにおいて提供されたプログラムは、のちに、一部の家族に対してだけでなく、すべての家族に提供されるべきであると認識されるようになり、2003年よりイギリス国内に居住するすべての家族を対象とした普遍的な施設であるチルドレンズ・センターへと移行した。チルドレンズ・センターは、現在では国内のすべての地域に設置されており、2011年現在、その数は3,600か所に上る。チルドレンズ・センターにおいては、子どもの健やかな育ちを保障するための多種多様なプログラムが展開されている。

筆者は、2011年3月1日から4日にかけて、イギリス国内の2か所のチルドレンズ・センターを

訪問し、職員に聞き取り調査を行った。本調査ノートではその内容を報告する。報告に先立って、シュア・スタートおよびチルドレンズ・センターに関する研究を以下に簡単に整理しておく。

1. 日本における研究

シュア・スタート、チルドレンズ・センターに関して日本で紹介されている論文・報告書には、埋橋、金子、鈴木、津崎、宮崎、矢口によるものがある。

埋橋(2009)は、近年シュア・スタートとチルドレンズ・センターの研究を行っており、シュア・スタートについて度々報告している。そのうちの一つに、評価機関・政府機関によって作成された報告書をまとめたものがある。第一に、シュア・スタートの概略に関する報告書(2008)をまとめている。次に、シュア・スタートの全国評価機構(National Evaluation of Sure Start, NESS)について説明した上で、シュア・スタートが実施されている地域の状況と全国の状況との比較を行った報告書をまとめている。この報告書は、シュア・スタートが実施されている地域では、健康問題、失業率、学童の学業不振、犯罪の発生率、公的扶助受給率のすべてが全国平均を大きく上回っていることを明らかにしている。第三の報告書では、シュア・スタートが実施されている地域に住む3歳児とその家族とそれがまだ実施されていない同じような状況の地域に住む3歳児とその家族との比較が行われている。この報告書は、シュア・スタート・プログラムに参加している親子は、そうでない親子と比べて健康面、学習環境、社会的態度などが良好であり、シュア・スタート・プログラムが親子双方に良い影響を与えていることを明らかにしている。最後に、当時シュア・スタートを管轄していた教育・雇用省によって作成された『子どもセンター実践の手引き』(2006)をまとめている。この手引きでは、効果的な運営、センターが特に意識すべきことについて記述するとともに、評価機関によって高く評価されたセンターの事例が紹介されている。

また、埋橋(2011)は、『イギリスに学ぶ子どもの貧困解決』第2章において、シュア・スタートの歩み、イギリスの就学前教育・保育の歴史と1997年以後の施策について説明している。

イギリスでは、1970年代から子どもの貧困率が上昇し、1995年には20%近くの子どもの貧困状態にあったが、1979年から1997年まで政権を握っていた保守党政権は子どもの貧困を大きく取り上げてこなかった。新しい労働党政権、ニュー・レイバーは、政権奪還後、財政の省庁横断的見直しを行い、従来の縦割り行政をやめ、子どものための財源を一元的に運用することを決めた。1997年以前は、問題を抱えており、支援が必要であると判断された就学前の子どもに対する公的な保育以外の施策が存在しなかったが、その背景には、政府が義務教育以上の教育制度の整備を優先し、それらに財源を投入していたことも関係している。それらの整備が完了し、就学前教育に財源を移動することが可能となった。

ニュー・レイバーは、国際競争の激化に対し、国民全体の学力の向上、福祉に依存して生活する人々の自立、ワーク・ライフ・バランスを推進することで対抗しようとしたが、これらは幼児教育・保育施策、そしてシュア・スタートの根幹となるものであった。

シュア・スタートは、新しい試みであったが、それは突然立ち現われたものではなく、戦前から積み重ねられてきた施策とそれらの施策では補完できなかった部分を埋めるために人々が行ってきた自助的な活動を基にしていることを埋橋は強調している。保健分野、教育分野ともに、1900年代初めに施策が実施されていた。1960年代には就学前の支援のために困窮した地域を中心にナーサリー・スクールが設置され、1970年代半ばには教育局、福祉局の財源を投入して質の高い保育、家族支援、地域開発事業を行うコンバインド・センターが設置された。これらの施策、そしてアメリカのヘッド・スタートなどの施策を参考にシュア・スタートは考案された。実践においては、地域に既に存在している社会的リソースが最大限に

生かされた。

ニュー・レイバーが実施した一連の施策によって、子どもの貧困は半減には至らなかったものの、低下しており、政府は「60万人の子どもを貧困から救った」としている。シュア・スタートは、1999年に、10年計画として開始されたが、その後法的根拠を得て、政権交代後も継続している。しかし、政権交代後は、チルドレンズ・センターの数が削減され、家庭へ出向いての支援が強化される傾向にある。

金子(2005)は、2004年にロンドン及びサウス・イーストに位置する地域の子どもと家族との支援を行うファミリー・センター(2か所)、アーリー・エクセレンス・センター(4か所)、シュア・スタート・センター(3か所)において行った聞き取り調査をもとに、「地域においてなんらかの支援を必要としていながら、見逃されやすい」グレイゾーンの家族の支援についてそれぞれのセンターの特徴を述べ、それらを類型化している。金子は、イングランドの児童福祉は家族の問題が「深刻化・顕在化」する前に地域において子どもと家族を支援し、問題の発生を防ぐ役割を果たしていると捉えており、その実践を行っている3種類のセンターにおいて調査を行った。

ファミリー・センターの設立は1970年代に遡る。この施設は、困難を抱える家庭で育つ子どもを施設に入所させるのではなく、地域で家族と一緒に生活していくことを目指し、家族への支援を行ってきたり。

金子は、訪問したファミリー・センターを治療型とコミュニティ型に分類している。治療型のセンターでは、ソーシャルサービスによって虐待などの深刻な問題を抱えた家族を対象として、家族療法などの専門的な治療を行っている。治療の効果はみられるが、治療の対象となるのは、自らの問題を認識し、解決しようとしている家族あるいは問題が深刻化・顕在化している家族に限られるため、グレイゾーンの家族には届いていない可能性が高いと金子は指摘している。コミュニティ型のセンターでは、日常的・継続的に家族と地域へ

の支援を行っており、それぞれが持つ力を引き出すように努めている。

アーリー・エクセレンス・センターは、1997年に創設された。この施設においては、幼児教育、保育、保健、家庭支援の4つを統合した支援が行われている。不利な地域に設置されたが、保育の質が高いため、困難を抱えた人に限らず、ミドル層を含む多様な家族が利用している。

金子は、訪問したアーリー・エクセレンス・センターを「生活」を重視する福祉型と教育を重視する教育型に分類している。教育型のセンターは、教育の質が高いため、ミドル層に支持されている。そのことにより、インクルージョンが実現するが、入所希望者が多く、あるセンターでは待機児が209人に達するという問題を抱えている。また、子どもの教育に偏る傾向もみられる。金子は、困難を抱えた家族のニーズが見過ごされたり、地域支援、コミュニティネットワーク、アウトリーチの視点が弱くなる点を指摘している。

シュア・スタート・センターは、1999年に不利な地域に設置された。シュア・スタート・センターにおいても保育を行っているが、どちらかという在宅で乳幼児を育てている家庭の支援の比率が高い。

金子は、訪問したシュア・スタート・センターをプログラム型とアウトリーチ&ネットワーク型に分類している。プログラム型のセンターでは、親が社会資源を活用できる能力を育成し、自立していくことに重点をおいており、多彩なプログラムが展開されている。一方、アウトリーチ&ネットワーク型のセンターでは、関係機関との連携、住民とのパートナーシップ、アウトリーチ、エンパワメントのための手法を用いたプログラムが展開されている。

金子は、シュア・スタート・センターにおける実践の重要な要素として、予防活動、家族・住民の参加、アウトリーチ、地域ネットワーク、子どもへの直接的な支援を挙げている。また、プログラムの参加については、参加が望まれる家族ほど参加しない傾向があるため、地域ネットワークと

アウトリーチに重点をおき、そのような家族をプログラムにつなげることが重要であると述べている。

鈴木(2008)は、シュア・スタート・プログラムとシュア・スタート・チルドレンズ・センターの概要を記した上で、その活動内容を紹介している。鈴木は、イギリスにおける保育・幼児教育改革と日本における幼保一元化、少子化対策としての子育て支援を比較し、日本で取られている対策は、経済的側面を重視したものであり、対症療法的であるため、議論の際には保育の質を考慮に入れる必要があると述べている。

津崎(2009)は1997年からの労働党政権、ニュー・レイバーが実施した子ども、家族、若者に対する施策について述べている。論文は、シュア・スタートとEvery Child Mattersの二つに焦点を当てている。

ニュー・レイバーは、児童貧困、社会的排除の削減・撲滅のための諸施策を実施し、それらを「すべての児童への平等なライフチャンス保障」としての緑書Every Child Mattersに結実させた。対象エリアを限定したシュア・スタートから普遍的なチルドレンズ・センターへの移行は、シュア・スタートにおいて提供されているサービスが一部の地域に限定されていることは不公平であるといった人々の不満を解消するだけでなく、Every Child Mattersを具体化するものでもあった。ニュー・レイバーは、旧労働党のソーシャリズムでなく、自由主義でもなく、「リベラルー共同体主義に基づく第三の道」を目指したが、その政策理念は、①協同施策思考・実践、②成果重視、③早期介入であった。ニュー・レイバーは、国際競争を強く意識し、児童への投資を最優先した(社会投資国家)。児童とその家族に対する施策は、①児童のいる全家庭への施策、②保育関連の税控除・手当、③要支援児童限定施策の3つの次元に分けられる。これらは、親の労働市場への参入を促すものであったが、親が就労し、賃金を得ることで貧困から抜け出し、子どもに対する親役割を果たすことを目指していた。ニュー・レイバーは、子

ども、家族、若者のライフチャンスを保障するための支援の仕組みを作り上げていったが、社会的養護児童やケア・リーヴァー(児童養護施設・里親のもとを離れた青少年)のライフチャンス保障には取り組んでいなかった。2007年にそのことが児童学校家族大臣によって取り上げられたことにより、社会的養護児童やケア・リーヴァーへの支援が議論され、具体化された。津崎は、ニュー・レイバーは、国際競争社会で勝ち抜くための人的資源要請を念頭に置きつつも、10年の間に児童・家族に対する様々な施策を実施し、公正・平等な社会実現を目指してきたと評価している。

宮崎ら(2010)は、2008年に北アイルランドの6か所のファミリー・センター、シュア・スタート実施施設において聞き取り調査を行っている。北アイルランドには、ライフ・スタート財団という子育てを支援する財団があり、その財団が一部のシュア・スタートを運営している。この財団では、家庭訪問員による家庭訪問を通して、教育プログラムを提供している。

センターの職員は、親との関係構築、親同士がつながりをつくることができるようにすること、そして自己肯定感が低い親たちに自信をつけてもらうことを重視している。親たちは、ボランティア活動やプログラム受講によるオープン・カレッジ・ネットワークによる単位認定などを通して、エンパワーされるという。

家庭訪問は、多くの家庭から歓迎されているが、中には、自分の親と同居している若い親や経済的に困窮しているために家具などが整っておらず、人を家に入れるのが恥ずかしいなどの理由で訪問を拒むケースもある。このようなケースに対しては、センターに誘い、センターで話をするようにしているが、家庭訪問という形態は難しいとの認識もあるようである。

矢口(2010)は、チルドレンズ・センターのスタッフたちの専門性についての研究を行っている。矢口が訪れたシュア・スタート・カーライル・サウスは、2006年度にその功績を全英で表彰された経験を持つセンターである。センターは、国が

らの補助金で設置され、自治体が運営していたが、2008年度よりチャリティ財団が運営している。スタッフは20人おり、それぞれが専門分野を活かして活動している。スタッフは、教育関係の資格と福祉関係の資格など、複数の資格を有している。親としてセンターと関わったことがきっかけでセンターの職員になった人もいる。センターのリーダーは、センターの設立以前から住民の声を聞き、住民とともにセンターを形づくってきた。リーダーによると、すべての成功しているセンターでは、トップダウンの運営を行っておらず、地域の人々の力を借りて運営している。地域のことは地域住民が一番よく知っていると認識し、彼らの意見を尊重している。センターの活動は、地域づくり部門とファミリー・サポート部門の二つの部門に分けられる。前者は親や地域の人々のためのプログラムを用意し、後者は子どもの保育と発達に課題を抱える子どもへの訪問を行っている。

矢口は、スタッフの意見として「子どもと親が自信をつけ、結果として地域も変わる」こと、「給料が低くて問題だが、この仕事の価値は大きい」ことを挙げ、スタッフの仕事に対する満足度は非常に高いと述べている。

センターが抱える課題として、パートタイムのスタッフがほとんど女性で、政策が変更する度に彼女たちが不利を被ること、併設保育園の保育士や保健師は給料が安定しているため、それらの職の方が人気であること、また、父親のためのグループや父親のサポートをする男性スタッフが少数であることを挙げている。

2. チルドレンズ・センターの概要

チルドレンズ・センターは、シュア・スタートにおいて提供されていた5歳未満の子どもとその家族、妊婦を対象としたサービスを普遍的に提供する施設である。サービスの内容は、各センターによって若干異なるが、①家族の健康面のサポート、②質の高いチャイルド・ケアと教育、子育てに関する相談、③地域の保育施設・保育サービスに関する相談、④求職、職業訓練に関する相談(公

共職業安定所や職業訓練提供者と協力して行う)については、すべてのセンターが必ず提供しなければならないことになっている。これら以外のサービスについては、家族や地域のニーズに合わせてそれぞれのセンターが提案・実施する。センターで提供されるサービスには、センターが企画・提供するものとセンターと提携している地域の多様な専門機関によって提供されるものがある。サービスは、スイミング、フィットネスクラスなどの一部を除き無料である²⁾。親を対象とした読み書きや算数のクラス、英語以外の言語を母国語とする親のための英語のクラス、ITのクラスは、求職支援の一環であるが、それと同時に、親が同じ地域に住む他の親たちと知り合い、交流することや自分のペースで学び、達成感を味わうことによって、自分に自信をつけることも目指している。親が自分を肯定的に捉えられるようになることで、子どもへの接し方に変化が生じ、子どもにも良い影響を及ぼすと考えられている。また、ベビー・マッサージや親子で遊ぶプログラムなど、スキンシップやコミュニケーションを通して親子の絆を感じ、良好な関係を築いていくこと、そして親としての自信をつけることを目指すプログラムも実施されている。このプログラムは、子どもとの関わり方に自信が持てない親や子どもとの関わり方がわからない親が、プログラムの中で実際に子どもと一緒に遊び、触れ合うことで、関わり方、遊び方の感覚をつかみ、親としての自信をつけることを目指している。

3. レインボー・チルドレンズ・センター

(1) 概要

レインボー・チルドレンズ・センター(以下Rチルドレンズ・センター)は、ロンドン北西部の都市、オックスフォードにあるセンターである。著者は、二日間にわたってRチルドレンズ・センターを訪れ、子どもの言語の発達を支援する話し方・言語セラピストのAさん、子どもの発達と親子の良好な関係構築の支援をするために、子どもの発達段階に応じた遊びを取り入れた親子のため

のプログラムなどを企画・運営している元幼稚園教諭のBさん、そしてセンター長に聞き取り調査を行った。また、初日には午前9時から行われるスタッフ・ミーティングに参加させていただいた。ミーティングは週に一度開かれている。ミーティングでは、初めに、それぞれの職員が自分の担当の分野のよいニュースを報告し、それを職員全員で共有する。次に、チームごとにそれぞれが担当するプログラムの進行状況や課題を報告し、共有する。

聞き取り調査とミーティングから得た事柄を以下に報告する。

Rチルドレンズ・センターが位置する地域（以下Rエリア）の人口は約13,000人である。この地域は、困難な状況に置かれた人々が生活する地域であると認識されている。現在Rチルドレンズ・センターにはRエリアに住む50%の家族が通っているが、この割合に到達するまで5年を要した。一年目は地域に住む8%の家族しか来ていなかったが、他の親からセンターの評判を聞いてセンターに来る親が増えてきた。しかし、中には、自分からセンターに来ることができず、地域で孤立した状態にある家族もいる。イギリスではヘルス・ビジター（保健訪問員）がすべての乳幼児の家を訪問して回り、子どもの様子を確認し、親が悩みを抱えている場合にはその相談に乗ることになっているが、その際に孤立していると感じた家族について、チルドレンズ・センターに報告する。報告を受けたチルドレンズ・センターは、その家族と連絡を取り、気軽に立ち寄って子どもを遊ばせたり他の親や職員と話をしたりできるステイ・アンド・プレイ³⁾などのプログラムを紹介する。外出を苦手とする親やセンターに足を踏み入れることをこわがる親に対しては、職員が家まで迎えに行ったり、センターの前で待ち合わせをして一緒にセンターに入ったりするなどの工夫をしている。センターへ来ることに抵抗を感じる親に対しては、バーベキューなどの楽しいアクティビティを催す際に誘い、それをきっかけにセンターを身近なものと感じてもらえるようにするなどの工夫

をしている。

Rチルドレンズ・センターにおいて提供されているプログラムには、親子が気軽に立ち寄り、好きなように時間を過ごすステイ・アンド・プレイ、昼食付のステイ・アンド・プレイ（昼食代約300円⁴⁾、子どもの言語発達の支援、親子が良好な関係を構築し、親が子どもの学び（広義の学習）に積極的に関わるができるように支援するプログラム（国のカリキュラムである、0歳から5歳までの子どもを対象としたEarly Years Foundation Stageに基づいてプログラムを考案）、英語を母国語としない親のための英語のクラス、禁煙コース、読書グループ、歌のコース、保育の資格取得のためのコース、カウンセリング技術を学ぶコース、助産師によるアドバイス・支援、求職相談、父親のグループ⁵⁾などがある。

Rチルドレンズ・センターはセンター内に保育所を設置していないが、近隣の保育所と提携しており、保育が必要な子どもは提携先の保育所に通っている。また、チルドレンズ・センターは、早期教育を専門とする有資格の教員をチャイルドケア・センターに派遣している。この教員は、チャイルドケア・センターの職員と共に働き、ケアの質の向上を手助けしている。

Rチルドレンズ・センターには約30名の職員がいるが、職員はそれぞれ、言語発達、幼児教育、特別支援、親の支援、父親との協働（父親の子育て参加を促進）、家庭内暴力への対応、インクルージョンなどの専門分野を持っている。職員は、よりよい支援ができるようにトレーニングを重ねている。職員は、専門の職員が協力して親を支えることで、親が自分に自信をつけていき、子どもへの接し方も変化すると考えている。子どもはセンターにおいて他の子どもたちと交わることによって他の子どもたちと一緒に過ごすことに慣れ、社会的になるとともに言葉を学んでいく。このことは、子どもの学校への適応をいくらか容易にすると考えられている。職員は、親子が置かれた困難な状況を変え、子どもがよりよいスタートを切ることができるように努力している。そして、自分

たちが協力して家族を支えることで家族を取り巻く状況を変えていっていることを実感しており、達成感を感じている。

(2) 話し方・言語セラピー

(Speech and Language Therapy)

このクラスでは、周りの子どもや大人とうまくコミュニケーションを取ることができない子どもを対象として、コミュニケーションの力をつけるための支援をしている。話し方・言語セラピストという、子どもの言語の発達を専門とする職員Aさんが支援をしている。子どもは、グループもしくはAさんと一対一で、ゲームなどをしながらもごとの概念を学ぶ。Aさんが支援している子どもは全員で80名である。一対一で支援している子どもの数は15名、グループで支援している子どもの数は65名で、各グループの子どもの数は6名である。これらのプログラムは、「スパイラル方法論(Spirals methodology)」という方法論に従って展開されている。

支援は、幼稚園等の教員が、言語の発達面で気になる子どもについてAさんに報告することから始まる。Aさんはまず支援の対象となる子どもの親と連絡を取る。連絡を受けた親はAさんのもとへ子どもを連れていかなければならない。万一訪ねて来ない場合は、再度文書で通知する。

他者とコミュニケーションを取ることができない子どもは、自分に自信を持つことができず、孤立しやすい。また、それが原因で家族との関係においても困難を抱える子どもがいる。このセラピーは、子どもがコミュニケーションの力を身に付け、学校や家庭など周囲の環境に適応できるようにすることを目的として行われている。

(3) 親を支える

チルドレンズ・センターでは、子ども、親子のためのプログラムの他に、親のためのプログラムが提供されている。親のためのプログラムには、前述したように、英語や算数、第二言語としての英語、IT、保育の資格取得のための支援、カウンセリングのスキルを身に付ける講座、就労支援などがある。センターにおけるプログラムは、全員

が前を向いて先生に何かを教えてもらう形態をとっておらず、円になって座って学ぶ。Rエリアでは、約40%の親が読み書きに困難を抱えている。読み書き、算術のコースや他の親と意見を共有したり、新しい事柄を学ぶことを楽しんだり、あるいは「どのようにして学ぶか(学び方)」を学んだりすることを促進する種々のコースは、そのような困難を抱えた親がこれらのスキルを身につけ、自分に自信をつけた上で就職活動に臨むことを可能にするために提供されている。

親のためのプログラムは、親からの要望に基づいて設定・開講される。過去に、親がネイル・ペインティングを学ぶことを望んだため、コースを開講したが、これは親たちに大変人気があった。このコースで達成感を味わったことにより、他のことにも興味を持つようになった親がいた。これから仕事を見つけようとしている親には、履歴書の書き方や面接の練習をするコースを提供している。これらの講座での経験は、就職だけでなく、高等教育機関への進学にも結びついている。

ステイ・アンド・プレイは、子どもと親のためのプログラムであり、子どもは様々な種類のおもちゃや屋外の遊具を使って他の子どもたちと遊び、遊び仲間から新しいことを学ぶが、親も、他の親子の関わり方を見て学ぶ。親は、他の親子から子どもとの接し方・遊び方を学ぶことによって、自分の子どもとの接し方に自信が持てるようになり、自己肯定感が高まる。また、親はプログラムを通して地域に住む他の親たちと出会い、地域に友人をつくる。これらのプログラムは、多方面から親を支えており、親の成長、さらには子どもの成長を支えている。

(4) 親が支える

センターは、親の自発性を尊重しており、利用者である親子のためにプログラムを用意するだけでなく、センターのために何かしたい、人の役に立ちたいと思った親のためにセンター内でのボランティアの枠を設けている。Rチルドレンズ・センターにおいては、かつてセンターを利用していた親たちがボランティアとしてステイ・アンド・

プレイ・ウィズ・ランチの際に提供するランチの調理と受け渡しの役割を担っている。また、自分はこちらにゆとりができたため、他の親の悩みの相談に乗りたいと考えている親のために、カウンセリング技術を学ぶコースも設けられている。親たちは、かつては他者に支えてもらう立場にあったが、現在はボランティアとしてセンターに来る親子を支えている。人のために働くことで人から感謝されるという経験は、その後の就労へと結びつく。この経験はまた、自分是人見知りであると思いついていた親が実はそうではないことに気づき、自信を持って初対面の人と接することができるようになったり、自分が人から必要とされていることを実感することによって、自分の存在意義を確認したりする機会にもなっている。

(5) 親の意思の尊重

チルドレンズ・センターは、シュア・スタートの特徴の一つである、親の意見を聞き、ニーズに応える姿勢を引き継いでいる。Rチルドレンズ・センターでは、プログラムに参加した親たちによるプログラムの評価アンケートを実施している。アンケートの内容は、①プログラムは良いものであったか。好きだったか、②それはどうしてか、③良くなかったと感じている場合は、どのようなものだったら良かったと思うか。改善点があれば教えてください、④プログラムを受講した後、あなたは何か以前と違ったことをしているか（プログラムを受講して変わった点は何か）、といった具合である。

さらにセンターでは、託児所の職員、監督者などの職員の採用の際には親がセンターの職員とともに面接官を務めることになっている。面接官は親を含めて3～4人である。親が面接官として面接に参加することによって、志願者の親に対する態度を見ることができる。職員に求められる最も大切なことの一つが、親との関係の構築である。親に対する態度・姿勢は当然ながら面接においても重視される。

(6) 親がセンターで得るもの

親は、センターで提供されている様々なプログ

ラムやボランティア活動を通して、自分の人生について考え、何らかの方向性を思い描き、そのことが新たな目標に向かって進んでいくきっかけとなっている。Rエリアには、外国から移住してきた家族、失業中の親など、様々な困難を抱えた人々が暮らしているが、彼らは自分に対する自信を失ってしまっている。彼らはこのセンターで、親しみやすい、親切な人々に出会い、様々な情報を得、様々なプログラムに参加することによって自信をつけ、子どもと共に成長している。これらの活動は、同じ地域に住む家族同士が出会い、つながりを作るきっかけとなっている。センターの職員は、チルドレンズ・センターとその取り組みは、人々にコミュニティの感覚を与えているのではないかと考えている。

(7) 今後の課題

Rエリアに居住する共働きの親の中には、自分の親に子どもを預けて働きに出ている親も少なからずいる。しかし、多くの場合、祖父母が乳幼児を連れて出かけることは年齢的・体力的に厳しい。Rチルドレンズ・センターでは、これまで乳幼児を抱えた親の孤立を防ぐための取り組みは行ってきたが、乳幼児を抱えて孤立している祖父母に対する特別なサポートはしてこなかった。今後は、祖父母たちと協力し、新たな活動を展開していく予定である（2011年10月に開始された）。

チルドレンズ・センターでは、母乳育児を奨励しており、ヘルス・ビジターが母乳育児をする母親の割合を増やそうとしているが、期待したようには増加しない。また、イギリスでは子どもの肥満が問題となっているが、センターに来る子どもたちも例外ではない。改善のためにボランティアの親に協力を依頼しようとしている。

また、親子の触れ合いが子どもの言語の発達、会話にとっていかに重要かという点も強調していくつもりである。今年はイギリスにおける、コミュニケーションの重要性を再確認する一年、ナショナル・イヤーズ・オブ・コミュニケーションとなっている。人は単語・言葉を知らないと話すことができない、というのは当然のことであるが、親た

ちの中には、乳児とは会話が成り立たないという理由で、乳児とコミュニケーションを取らない親もいる。コミュニケーションの重要性を親に認識してもらう必要がある。親子がリラックスした雰囲気の中で触れ合う機会を提供するベビー・マッサージのコースはすでに開講しており、人気のコースとなっているが、他に何をすべきなのかを模索しているところである。

4. ハッピー・デイズ・チルドレンズ・センター

(1) 概要

ハッピー・デイズ・チルドレンズ・センター（以下Hチルドレンズ・センター）は、オックスフォード州の隣の州、パークシャー州レディングにある。Hチルドレンズ・センターがある地域（以下Hエリア）は、困難な状況に置かれた人々が多く生活する地域であると認識されている。この地域には、5歳未満の子どもを持つ家庭が432世帯あり、735人の5歳未満の子どもが生活している。選挙権を持つ住民の数は約16,000人である。この地域は、近年人口が増加しており、市内で特に成長が著しい地域である。

センターには、大きく分けて、ファミリー・ディベロップメント・ワーカー、ファミリー・ビジティング・チーム、話し方・言語セラピー、保育所の4つの部門がある。これらのうち、ファミリー・ビジティング・チームと話し方・言語セラピーは、近隣にある国民保健サービス（National Health Service, NHS）に属しており、これらのチームに所属する職員はチルドレンズ・センターではなく、NHSに雇われている。Hチルドレンズ・センターは、このチームのサービスを購入している。Hチルドレンズ・センターも、Rチルドレンズ・センターと同様、近隣にある他の機関・組織と連携して地域に住む親子を支援している。Hチルドレンズ・センターにおいては、ファミリー・ビジティング・チームの一員である元幼稚園教諭のCさんにお話を伺った。

Hチルドレンズ・センターは、施設内に保育所を設置している。保育所には、親の就労のために

預けられている子どもの他に、社会福祉関係の職員が保育所に入れることが望ましいと判断した子どもも在籍している。

ファミリー・ディベロップメント・ワーカーは、5歳未満の子どもとその親・養育者を対象とした多様なアクティビティを企画・実施している。子どもとその家族を対象としたアクティビティには、クラフト、歌、読み聞かせ、メッシー・プレイ（直訳：汚い、散らかった遊び。普段は洋服を汚してはいけないと言われている子どもたちが、どろどろになって遊ぶことができるプログラム）、乳児や歩き始めの子どものグループ、親子遠足、父親のためのアクティビティなどがある。また、親を対象として、英語（読み書き）、算数のクラス、英語以外の言語を母国語とする人のための英語のクラス、ITのクラス、料理教室、応急処置講座、クラフト教室、健康教室などが開かれている。Hチルドレンズ・センターにおいても親がコースを受講している間は、子どもを無料でセンター内に設置されている託児所に預けることができる。

Hエリアには、10代の親も暮らしている。現在は、10代の親が気軽に立ち寄って、子どもを遊ばせたり、他の親や職員と話をしたりできる時間を設けている。近々ロビーとキッチンを改装してカフェを作ることになっているため、そこでボランティアのスタッフとして働いてみないかと彼らに声をかけているところである。

センター内には、照明を落とした静かな部屋が一室ある。この部屋は、家族がお祈りをする時や落ち込んでいて、静かな場所で一人になりたい時に利用されている。

(2) ファミリー・ビジティング・チーム

このチームの専門は、ケア・子育てと健康に関することであり、親に子どもの発達と健康（食生活、歯の健康を含む）についての助言を行っている。このチームは、シュア・スタートの成立以前は存在しなかった。チームは4人の職員で構成されており、そのうち2人が幼稚園教諭の資格を有している。1人は産後うつなどの精神衛生を専門とする看護師である。幼稚園教諭の資格を持つ職

員は、家庭を訪問し、持参した資料（月齢に応じたもの）を基に親と子どもの発達段階についての話をしたり、持参したおもちゃで子どもと遊んだりする。子どもとどのようにして遊べばよいのかわからない親もいるため、このような方法が取られている。

訪問の対象となる家族については、主にヘルス・ビジターで構成されるヘルス・ビジティング・チームあるいはHチルドレンズ・センターから報告を受けることになっているが、医師（General Practitioner, GP）や教員、社会福祉関係の職員から連絡が来ることもある。昨年は191家族を訪問したとのことである。ファミリー・ビジティング・チームが行っている活動は以下の3つである。

〈Baby Talk Baby Play〉

親が乳幼児の発達の段階を理解し、子どもとの強い絆を築くことを助けるプログラムである。親にとって初めての子育てとなる第一子の子育てへの支援は特に重要であるとされている。このプログラムは、Hチルドレンズ・センター独自のプログラムである。内容は前述した北アイルランドにおける家庭訪問員のそれに類似している。幼稚園教諭の資格を持つ職員が、0歳から1歳までの子どもを持つ家庭を3か月に1回、1歳から2歳までの子どもを持つ家庭を6ヶ月に1回、それぞれ1時間半訪問することになっている。職員は、子どもに良い刺激を与える遊びや言語を実演するために、月齢に合ったおもちゃを持参し、子どもと一緒に遊ぶ。また、乳児がとる行動の意味や発達段階に応じた接し方について書かれた資料（ファミリー・ビジティング・チームが独自に作成）を持参し、親と一緒に読み、子どもについての理解を深める手助けをする。親と職員はこの訪問の際に気軽に話をする。

〈Toddlers and Gigglers〉

Toddlersは1歳未満の子どもとその親・養育者、Gigglersは1歳から2歳までの子どもとその親・養育者を対象としている。様々な事情で外出することが難しい家族を対象としている。週に1回、1時間半、NHSの建物の一室で行われてい

る。親は、Toddlersで、座って他の親と話をする。子どもは、Gigglersで、歌、本、お絵かきなどで遊ぶ。子どもの安全の責任は親が持つことになっているため、親は子どもを残してその場を離れてはならないことになっている。ここでは、親も子どもも他の親子を見て学ぶ。お互いがお互いの見本となるのである。例えば、子どもたちは、座っている子どもたちを見て、座ることを学ぶ。Toddlers and Gigglersには、精神衛生を専門とする看護師が隔週参加し、悩みを抱える親の相談に乗っている。

〈Safety Visit〉

この訪問は、家庭内での子どもの事故を防ぐために行われている。すでに一度訪問し、これから二度目の訪問をしようとしているところである（新しいプログラムである）。職員は、はじめに、親に家庭内の安全に関するクイズを出題する。次に、一緒に家の中を歩いて回り、子どもにとって危険な箇所がないか確認する。現在、無料で安全器具や乳幼児が階段などの家の中の危険な場所に侵入することを防ぐ柵を配布している。また、子どもが病気やけがをした時に、どの病院に行ったらよいのかを示すカードも配布している（GPの診察は無料であるが、大きな病院で診てもらおうと医療費がかかるため）。擦り傷など症状が軽い場合には、GPを受診するように助言している。

（3）家族との接触の難しさ

大部分の家族は、職員の訪問に対応するが、中には、職員と会うことを避ける、拒否するといった接触しづらい家族（リーチしづらい家族、hard to reach family）もいる。職員を避ける理由は家族によって異なるが、単に家族と職員の性格が合わないだけで、よいタイミングで気の合う職員と出会うケースもある。新生児がいるすべての家庭を訪問するヘルス・ビジターも家の中に入れてもらえないことがあるが、その際には家に再度電話するなど、挑戦し続けるしかない。しかし、そのように繰り返し接触を試みることは、子ども虐待に関わる問題がなければ、嫌がらせと受け取られることがあるため、注意が必要である。親は、へ

ルス・ビジターによる訪問を強制されないが、親からはプロセスの一環であると認識されており、ほとんどの親は受け入れている。

ファミリー・ビジティング・チームの職員は、他の分野の職員と同様に仕事にやりがいを感じているが、困難を抱えた家族と直接関わるため、特有の悩みもある。職員が抱える具体的な悩みを以下に挙げる。

- ①携帯電話の番号を頻繁に変更する親とは連絡を取るのが難しい。事前にアポイントメントを取って家庭を訪問するが、外出して家に行かないことがある。そういった親は、規定どおりに行動することに慣れていない。例えば、約束の日に家庭を訪問しても誰もいないため、携帯電話に電話をしてみると、「他の約束がある」「今買い物をしている」と言われることがある。重要性をわかっていないのかもしれないし、職員に会いたくないのかもしれない。もしくは英語がうまく話せないからかもしれない。英語を話すことができない家族を訪問する際には、通訳を連れて行くことがある。親自身が学習障害を持っているケースもある。
- ②パートナー（主に男性）や同居している実の親、義理の親が、家に職員が来ることを嫌がることがある。
- ③他の専門職の人との関わりで過去に嫌な経験をしたために職員を拒否する人もいる。
- ④親が、職員が訪問することになっている日に自分の友人たちを家に招待して、訪問中に友人たちと話をしていることがしばしばある。
- ⑤訪問の重要性をわかっておらず、職員に興味がないため、職員の訪問中にインターネットなどをしていることがある。
- ⑥暴力、薬物については注意をしなければならない。これらの問題を抱えた家族については、ヘルス・ビジターが事前に職員に教えてくれる。このような家族を訪問する際には、職員の安全性が確保されていなければならない。職員同士で電話をかけ合ったりして、状況を判断してい

る。

（４）職員の離職

チルドレンズ・センターが抱える問題の一つとして、離職率の高さが指摘されているが、仕事の厳しさが要因となっているようである。具体的には、チルドレンズ・センターや子どもに関する政策や制度が頻繁に変わるため、常に緊張を要すること、予算の不足、支援が必要な状況に置かれているにも関わらず支援を拒否する家族との関係、賃金の低さなどが挙げられる。仮によりよい条件の職場が見つければ辞職する人もいるだろうとのことであった。職員の離職は、家族にも影響を及ぼす。家族の中には、新しい人に会うことをこわがる家族もいる。職員と家族が関係を築くには時間を要するため、家族とよい関係性を築くことができていた職員の離職は、家族にとって残念なことであると職員は話していた。

（５）予算

シュア・スタートを提案・実施し、チルドレンズ・センターへと移行した労働党前政権は、プログラムを進めるための予算を多く確保していた。しかし、保守党政権となってからは、その額は削減されており、今後も大幅に削減されるとみられている。前述したように、現在国内のすべてのコミュニティにチルドレンズ・センターが設置されているが、予算の不足は、一部のセンターの閉鎖を意味するであろうと現場の職員は考えていた。さらに、このファミリー・ビジティング・チームを存続することができないかもしれないとまで言っていた。

（６）職員からみたチルドレンズ・センターと早期介入

職員は、乳幼児期の子どもに対して財源を投入し、早期に介入することは重要であると考えている。職員は、変わる必要があるのは子どもではなく親であるとみており、親たちが幸福感を感じ、周囲の状況をよりよく理解することができるようになれば、親も子どももよくなると考えている。チルドレンズ・センターにおけるプログラムは、

親の参加なしで進めていくことはできない。その点で学校における教育とは異なる。職員はまず親との信頼関係を構築しなければならない。職員と親と一緒に挑戦するのである。職員と親は、子育ての問題とは異なる問題を第一に解決しなければならない場合がある。例えば、家に暖房設備がないなどである。こういった問題の解決にみられるように、職員は問題の質に関わらず、親を全面的に支えるようにしなければならない。職員は家族が抱えている問題を見つけ、それに対して何かすることができるだろうと考えている。職員は、親たちが気兼ねなく自分たちに相談することができるように、親しみやすい存在である必要があるということを常に意識し、仕事に取り組んでいる。親が抱える問題は本当に小さなものであることもあるが、そういったことも話せるような存在でなければならない。職員は、チルドレンズ・センターにおけるプログラムの必要性を感じながら日々活動しており、政府がこのプログラムを実施しなければ、子どもが学校に入学する頃に大きな穴が開くであろうと指摘している。また、プログラムの原理、アイデア、効率性について評価している。

まとめ

以上、訪問調査で聞き取ったことを報告してきた。以下、今後検討しなければならないと思われる点、関心を持った点を記す。

(1) 親の参加・学びなおし

チルドレンズ・センターは、子どもとその家族のためのセンターであり、両方の支援を行っている。親への支援による親の自信回復と自尊感情の高まり、良好な親子関係の形成など、その効果は大きい。

センターは常に親の意見に耳を傾け、それらをプログラムやセンター運営に反映するように努めている。親には帰属意識が生まれ、センターの活動に積極的に関わろうとする親も出てくる。また、親が自分の能力を伸ばす機会が数多く設けられており、その経験がその後の就職や進学につながる。親たちは、落ち着いた環境で「学びなおし」をす

ることで、これまで自分には理解できないと思い込んでいた事柄を徐々に身に付けていく。彼らが新しい事柄を学び、自信をつけていくことで、彼らの子どもへの接し方も変わってくる。一般的に、親になると自分が主役になる機会は減るが、センターにおいては親も主役となる。センターでは、親を子どもの付添い人としてだけでなく、可能性と意思を持った一人の人と捉え、親を主役とした支援も行う。聞き取り調査に協力して下さったすべての職員が口にしたのが、「親の自信」「親の自尊心」という言葉である。職員が、自信を失ってしまっている親の自信を回復することを常に意識して親子を支えているということが伝わってきた。

(2) 家族との接触の難しさ

様々な事情から、チルドレンズ・センターの職員と接触することを拒む家族がいるが、その中には、職員の側から見て支援が必要であると判断される家族も含まれる。支援が必要であるにも関わらず、それを拒む家族をどう支えていくかは大きな課題となっている。

(3) 職員の離職

職員の質はセンターによってまちまちなようであるが、全体的に職員の質と離職率の高さが問題となっている。今後は、仕事にやりがいを感じている彼らが安定して仕事を継続できるような仕組みを模索していくべきであろう。

注

- 1) これは金子が清水の整理に基づいて書いたものである。清水隆則(1998)「地域における子育て支援のあり方・英国のファミリーセンターを例として」『社会福祉学』39(1)、56-73。
- 2) Hチルドレンズ・センターで提供されているスイミングのチケットは約300円である。
- 3) Stay and Play(月曜日1 pm-3 pm、金曜日9 am-2:45 pm) 親たちとその子どもたちが好きな時間・曜日にセンターに来て、好きなように時間を過ごす。子どもたちはセンターのおもちゃや遊具で遊び、親は自分の子どもと遊んだり、センターの職員や他の

親と話したりする。子どもが遊んでいる間、監督をするのは職員ではなく、親である。

4) Stay and Play with lunch (火曜日 11 am-2 pm) 一人あたり¥2 (約 300 円) のランチ (サンドイッチとサラダ、皮付きベイクト・ポテト (jacket potato) など) が提供される。

5) 地域の父親同士のつながりと父親と子どもの結びつきを強めることを目的として、父親を対象としたサッカー (土曜日) や父親と子どもを対象としたイベントが開催されている。

参考文献

埋橋玲子 (2011) 「シュア・スタートとイギリスの乳幼児・家族支援」「なくそう! 子どもの貧困」全国ネットワーク編『日本の「子どもの貧困対策法」にむけて イギリスに学ぶ子どもの貧困解決』かもがわ出版所収。

埋橋玲子 (2009) 「イギリスのシュア・スタート — 貧困の連鎖を断ち切るための未来への投資・地域プログラムから子どもセンターへ」『四天王寺大学紀要』(48)、377-388。

埋橋玲子 (2011) 「子どもの社会的不利に対する社会政

策 イギリスのシュア・スタート」『公衆衛生』医学書院 (Vol.75、No.3)、183-186。

金子恵美 (2005) 「地域における子ども家庭福祉の展開に関する研究—イギリスにおけるグレイゾーンへのファミリーサポート」『日本社会事業大学研究紀要』51、227-268。

鈴木俊之 (2008) 「シュア・スタート・チルドレンズ・センターの機能と構造」『関西教育学会年報』(32)、121-125。

津崎哲雄 (2009) 「ニューレイバーの児童 (・家族) 施策 — 平等なライフチャンス保障実験—」『海外社会保障研究』(169)、71-82。

日置真世、武田るい子、市原純、杉山晋平 (2010) 「乳幼児期のファミリーサポート」。宮崎隆志『北アイルランドにおける子ども・家族・若者支援移行支援実践調査報告書』所収。

矢口悦子 (2010) 「シュア・スタート事業に見る複合的施設職員に求められる専門性 — イギリス・カーライル・サウス・子どもセンターのスタッフたち」『月刊社会教育』54 (8)、66-74。

(北海道大学大学院教育学院・修士課程)